

「顔を洗いなさい」

イザヤ書 第58篇6節～10節
マタイによる福音書 第6章16節～18節

説教 岡村 恒牧師

「あなたがたは断食をする時には、自分の頭に油を塗り、顔を洗いなさい」(マタイによる福音書 第6章17節)。〈断食〉とは、私たちを地上につなぎ止めるものから身を切り離して、ひたすら神を思い、祈りを捧げるためのひとつの手段です。主イエスの時代、神に集中をして祈るために、〈断食〉は不可欠なものでした。

しかし、神に向かって祈りを捧げ、自分の願いや悲しみを神の前に吐露し、何とかしてそれに応えていただきたいと願いながら、よくよく注意すると、それは神に向かって叫ぶよりは、むしろ周りにいる兄弟姉妹に見せていることがありました。主イエスが〈偽善者〉と呼ぶ多くの律法学者やパリサイ人たちだけでなく、ごく普通の人々にも同じ傾向がありました。〈断食〉をして陰気な顔つきをし、自分の顔をわざわざ見苦しくして人に見せるその祈りは、神の応えを得るよりも、既に人から報いを受けている。主イエスはそう指摘されました。誰かの痛みや悲しみを共有し、寄り添って一緒に悲しむことができれば、その人は慰められるかもしれません。しかし、本当に祈るべき方に祈ることができず、自分の隣にいる人に共感されることで良いと思いをし、人に見せようとしたら、そんなちっぽけな〈報い〉はあまりに悲しすぎるのです。私たちにはもっと豊かな〈報い〉が用意されているのだと主イエスは言われています。

「自分の頭に油を塗り、顔を洗って」祈ったら良い。さっぱりとした顔で、颯爽と地上の旅を歩んで良い。あなたの抱えている悲しみや苦しみ、痛み、恐れや不安は、隠れた所においてになる神が見ておられる。〈断食〉をして神にすがりつくように祈ることで、人ではなく、ただ神にだけ全てを知られて、神から本当の報いを与えられて生きる生き方があるのです。

〈主の祈り〉は、信仰者が共に声を合わせて「われらの父よ」と呼びかけ、〈わたしたち〉のために糧を、〈わたしたち〉の罪の赦しを、〈わたしたち〉を試みから解放して下さい、と祈ります。しかし、それに続くこの16節から18節では「あなたの父」と主イエスは語られます。〈わたしたち〉の父である神ご自身が、〈わたし〉の父として、1対1の関係で私たちに関わり、祈りを聞いて下さる、という話です。信仰者の群れの中で共に祈り始めた私たちが、人に知られない隠れた所で神に心を開いて祈る時、そこに〈私〉の父として神が到来をし、〈私〉の心の叫びをひとつひ

とつ聞きあげて下さる、というのです。

それは本来なら恐ろしい事実です。誰にも知られたくない心の深み、自分自身さえ目を背けたくなるような心の中の醜さ、神に背を向けて歩き続ける愚かさを、全知全能の神が知り尽くしておられる。この事実の前で、私たちは穏やかにいることはできません。神が隠れた事を見て、それに報いて下さる。この言葉はそのまま、私たちに絶望を与える言葉です。

生まれながらに罪人である私たちに与えられる報いは、本来なら、死と滅び以外にあり得ません。しかし、主イエス・キリストが、私たちの罪の代償としての死と滅びを、私たちの愚かさの結末を、全部ご自分のものとして受け、あの十字架の上で私たちに代わって決着をつけてくださいました。〈あなたの父は、あなたを見ている。あなたの父は、あなたに報いてくださる〉。そう宣言をして下さった主イエスが、私たちの報いを、死と滅びから命へと置き換えて下さいました。ですから、私たちは神に一切を知られているということ、恐れではなく、喜びと感謝とをもって聞き取ることができます。私たちの心の内のどうしようもない不信仰な思い、汚れた思い、人に対する憎しみでさえ、神はご存知で、赦しを与え、それらに替えて神を愛する思い、人を愛する思いを与えて下さいます。

身体が食べることを飲むことを欲するように、私たちの心は様々な満足や喜びを求め、飢え渇きます。ですから、時には、自分の心の欲求を断念して、神に思いを向けることに集中したら良いのです。心の〈断食〉をして、一心不乱に神に祈ることに集中したら良い。今日の御言葉はそのようにも聞こえます。

神に愛され、祈りが聞かれていることを知っている者として、さっぱりした顔で神に心に向けて生きたいと思います。神に感謝を捧げ、御名を誉め讃える習慣が、私たちの日常生活の中でもっと大きな位置を占めるように願います。主イエスによって与えられている神の報いがどれほど大きいのか、どれほど豊かか、私たちは味わいながら歩みます。神は一人一人に〈私〉の父として関わり、その思いをつぶさに聞きあげた上で、赦しを与え、祝福を与えて下さいます。そのような私たちの日常の歩みがいつでも神に捉えられ、神に心を向ける歩みとして祝福をされるように祈りましょう。

(記 説教要約奉仕者)